

『バルザックの肖像』

テオフィル・ゴーティエの翻訳（1）

佐藤雅男*

前文（解題）

テオフィル・ゴーティエ（Théophile Gautier, 1811年-1872年）は、フランスの文学者であり、*Honoré de Balzac* の評伝は1858年に出版された⁽¹⁾。ゴーティエは幼児からパリに育ち、画家を志願したが、学生時代にネルヴァルの紹介でヴィクトル・ユーゴーと出会う。所謂ロマン派として出発するが、やがて当時のロマン主義に嫌気がさし、そこから離脱した。男装の麗人を描いた『モーパン嬢』の序文では、「真に美しいものは、何の役にも立たないものに限られる。有益なものは全て醜い。何らかの欲求の現れだからだ。そして人間の生理的欲求は、貧相かつ脆弱な本性と同様に、不潔で嫌悪すべきものだ。（中略）功利派諸氏には申し訳ないが、私は余計なものを必要とする人間だ。事物や友人に寄せる私の愛情は、それが私に役立つ程度に反比例して深まる。私は使用中の壺よりも、全く役に立たない龍や清の高官（マンダリン）の絵柄をもつ支那の壺の方が好きだ。」（『モーパン嬢 上』改訂第二版, 1845年, 訳者 井村実名子, 岩波文庫, 2006年）と宣言した。翌年には、雑誌『アルチスト』の編集者になり、芸術そのものが手段ではなく目的との主張で、当時のロマン主義における芸術の社会的有用性を批判した。

*専修大学文学部兼任講師

ゴージェの代表的作品には、『螺鈿七宝集』（1852年）の詩集があり、同時期に、『イタリヤ』（1852年）や『コンスタンチノーブル』（1853年）などの紀行文も書いた。この作家のことは、ソーニエの『十九世紀フランス文学』では、「巨人たちの世代」（ヴィクトル・ユーゴーやバルザックなど、1830年代）以降の、「客観主義の世代」（フローベルやボードレールまで、1850年代）に位置付けている。そして、その詩人の特質は、「ロマン主義のもっていた感傷性、道徳性、哲学的観念を排して、もっぱら詩句の絵画的・造型的・技術的完成だけを目標として、無感動を理想とする高踏派の美学に到達し」たとも解説される。（『フランス文学案内』渡辺一夫、鈴木力衛）ゴージェとは、所謂「芸術のための芸術」を信条とした高踏派の先駆者であった。だが、こうした文学史の規定だけでは、その個性的作家の特質を取りこぼす。ソーニエも解説で、「現在（1952年版）、ゴージェは正当に評価されていない。何故なら、彼の『螺鈿』詩集は健全な酒脱味のある官能性に加えて、非常にしっかりした気質を實に見事に表現する体験の血のにじむ詩を含んでいるからだ。また彼の旅行の物語は、絵画的な詩想にあふれた傑作である。」と言う。

一般的にゴージェは、ネルヴァルなどと共に「青年フランス派」に位置付けられ、ユートピア的共和主義者の「ブーザンゴ」とは区別される。しかし、ソーニエは、「ゴージェはその生涯にわたって《ブーザンゴ》的な激情を幾分か持っていた。」と言う。「ブーザンゴ」(bousingot)とは、所謂「青年フランス派」よりも、騒ぎ好きで、純粹に文学・芸術の枠困に止まらず、政治的動乱にまきこまれながら、ブルジョワや俗物、月並みなるものを軽蔑し、権威を敵視し、中世の風物や地方色を尊重し、風変わりな服装を好んだ。そして、そうした傾向はロマン派という大きな潮流の中に没してしまった連中のことである。

ソーニエは、ゴージェを、そうした文学史の枠に収まらない存在と見なし、相反両立的で過剰な性格を持った作家に対して、「幾分子供っぽい

無軌道さだが、粗々しいイメージの感覚と結びつけられているので、少々彼の言い方を借りれば、『べら棒』に我々の共感を呼ぶ」という評価を与える。そして、ゴーティエが心から敬愛したバルザックという作家の巨大さとは、それが生活力に溢れたロマン主義者でもあり、且つ写実主義者でもあったことによる。原因は創造的作家の過剰なエネルギーによると考えられるが、そうした多様な性格からの相反両立的な規定の難しさから、バルザックに関する解説が、ゴーティエと同様に、どちらか一方の立場に偏向したり、またはっきりしない場合がある。後に見るが、代表的なバルザック評伝も、その評家自身の思念を加担するが故に、ロマン主義か写実主義の主張に偏っている⁽²⁾。

Honoré de Balzac (1858年)の本文で、ゴーティエ自身が述べているが、バルザック(1799-1850)に、『クロニック・ド・パリ』の共同執筆を促されたのは、その『モーバン嬢』の文体が高く評価されたからである。この作品は、バルザックの他界から8年後の評伝であり、妹のロール・シュルヴィルの『わが兄バルザック——その生涯と作品』(1858年)に前後して出版された⁽³⁾。ゴーティエの本文中にも、「私が引用する文献は、彼の妹のロール・シュルヴィルの評伝と彼自身の作品によるもの」という但し書きがある。バルザック評伝としては、最初期のものであり、文献的資料の限定は否めない。だが、その表現の材料は、バルザック作品からの大胆な引用と親しい関係性からの実体験的なものが主流であり、そこからの直かなる判断が評価の基準になっている。そこには大きな先達に死なれた喪失感が内在され、そうした悲しみから、言語表現における絵画的造形美の自律性を志向したような特質がある。

バルザックに関する文献に、ジュール・ベルトー(Jules Bertaut 1877-1959)という文学者の『バルザック逸話集』(*Balzac anecdotique* 1908年)がある。ベルトーは序文で、バルザックをロマン主義者と見なし、その周囲に居た人々が語った42個の逸話を編集した⁽⁴⁾。そこに、先ず最初に語

られるのが、ゴーティエの、「1、特徴のある鼻と猛獣使いの眼」である。バルザックの特異な風貌をめぐる濃厚な描写は、絵画的造形性の実現である。また、逆に簡潔に淡々と語られる「10、煙草嫌い」には、洒落な描写から、その生理的特性を際立たせている。ゴーティエの語りは、ほんの2個に過ぎないが、その求心力のある描写が、他の拡散的な興味をそそる逸話全体の配列を引き締めている。

日本語に翻訳されたバルザックの評伝は多くないが、本格的なものとしてはシュテファン・ツヴァイクの『バルザック』がある⁽⁵⁾。そこでツヴァイクは、伝承されたバルザック像の半分は戯画に過ぎず、肖像画ではないと言う。また、同時代人達が多くの逸話を記述したが、そこに重要な生活描写は何一つなく、「のらくら者でぶらつき屋のゴズランやヴェルデやジャンンのような輩には、全て見えじまいであった」（「第八章 書斎の内と外」と言う。ツヴァイクは、バルザックを写実主義者と見なす。そして、ゴズラン達の逸話を効果的に活用しながら、バルザックという創造的作家の写實的絵図を象徴的に呈示した。

ツヴァイクとは対極的な性格を持つ評伝に、アンリ・トロワイヤの『バルザック伝』がある。トロワイヤは自身のバルザック像を打ち出すよりも、書簡や逸話的資料を駆使することに徹した。そこにもゴズランの『部屋履きのバルザック』や、ゴーティエの *Honoré de Balzac* は、引用される。それを翻訳者の尾河直哉は、『バルザックの肖像』（注、137）と題名する⁽⁶⁾。トロワイヤの方法は、作家の肖像を呈示するに際して、豊富な客観的資料を活用することである。近代日本の文学と思想に大きな影響を与えたバルザックの作品に関しては、その多くが日本語に翻訳され、書簡も全集に収録されている。日本人によるバルザックの作品論や評伝類も多くあるが、ゴーティエによるバルザックの本格的評伝の日本語訳はない。

ゴーティエには、『ボードレール』（1868年）という題で、『悪の華』の「序文評伝」があり、田辺貞之助や井村実名子の翻訳がある⁽⁷⁾。日本近代

思想史において、ボードレールに優るとも劣らないバルザックの影響を思えば、バルザック評伝として、ロール・シュルヴィルの『わが兄バルザック——その生涯と作品』の双璧をなすゴーチェの作品が、日本語で読めないのは問題である。それで、*Honoré de Balzac* を『バルザックの肖像』の題にして、仏文の拙訳を試行してみる。全訳すれば、400字詰め原稿用紙で200枚余りの量である。全6章の作品であるが、4回の連載計画で、今回はI章からII章の途中までである。ご叱咤とご教示をいただければ幸いである。

翻訳『バルザックの肖像』 テオフィル・ゴーティエ

I,

1835年頃、私は 現在のルパピリオン・モランの場所から、そう遠くないランパス・デュワイヤネの小さな二つの部屋に住んでいた。ルーブル宮殿からほんの僅かの距離で、テュルリー公園に面したパリの中心地であったが、その場所は荒れて閑散としていた。そこで私を見つけるには、根気よい忍耐を続けねばならなかった。しかし、或る朝、若くて目立った外見と実直な雰囲気を持った男が、玄関に近づき、自己紹介の許しを申し出た。それはジュール・サンドであった。彼はバルザックの代りに、『クロニク・ド・パリ』の一員に、私を誘うために来た。その週刊誌のことは、よく知っていたが、それは当然のように財政逼迫の現状にあることも分かっていた。サンドは、バルザックは、ごく最近、私が出版した『モーパン嬢』を読んで、その文体を賞賛し、彼が後援し指揮する雑誌に、私の協力を望んでいると告げた。私達が集まる日が設定され、その日から、ただ死だけしか毀すことの出来ない友情が成立することになった。

私がこうした物語をするにしても、御世辞やへつらいの一種ではない。

それは、まさにバルザックの栄誉のためである。当時から既に、その存在は有名であり、彼はむしろ新鮮な何かを探していた。友情と完全なる平等の精神で、共同執筆する無名の若い作者を求めていたのである。その時は、まだバルザックは『人間喜劇』の作者ではない。しかし、『結婚の生理学』『あら皮』『ルイ・ランベール』『セラフィタ』『ウージェニー・グランデ』『十三人組物語』『田舎医者』『ゴリオ爺さん』などを完成していた。さらに数篇の短編があり、その5つか6つは、堅実な評価に十分なものであった。彼の初期の栄誉は、新しい光で日毎に強くなり、オーロラの壮麗さで輝いていた。確かに彼は、同時代人のラ・マルティエヌ、ヴィクトル・ユーゴー、ヴィグニー、ミュッセ、サント・ヴーズ、アレクサンドル・デュマ、メリメ、ジョルジュ・サンドや他の多くの作家達と同様に輝いていた。だが、バルザックは、その生涯に於いて、文学の偉大なるラマ僧のように振舞わなかった。彼はいつも気の良い仲間で、そこに矜持はあっても、虚栄心は全くなかった。

ルクセンブルグのジャルディ荘での最後の頃、彼は天文台に近いカッシーニ通りの辺りに、近隣の人々に怪しまれずに暮らしていた。バルザックが住居の全面をふさいだ庭の壁の端に、“Labsolu”という煉瓦の看板があった。いまだに、そこに残る奇妙な暗号は、私が間違っていないなら、『絶対の探求』以外の、他の如何なる閃きを持ってないほど、非常に印象的なものである。この決定的な記号は、おそらく彼の不可能な夢の追跡であり、バルタザール・クラースの思想の暗示である。

私が初めて彼に会った時、バルザックは、1835年という今世紀の時代より1年上の、36歳であった。そして、その顔つきは、出会った人には決して忘れられない一つの印象を与えた。彼が居る所では、人はジュリアス・シーザーに対するシェークスピアのことを思い出す。「彼の前では、大いなる自然が立ち上がって、世界に向かって『これこそ人間である!』と言わざるを得ない。私の心臓は強く鼓動した。何故なら、戦慄的な思いなし

に、決して私は彼に接近が出来ず、私が準備した全ての物語の方法も、喉が締め付けられ、『今日は実に気分が爽快だ。』という愚鈍な言葉しか発することが出来なかった。」ハインリッヒ・ハイネも、ゲーテを訪問した時、イエナからワイマールの道中、プラムが木から落ちるのを見て、それをドイツ詩で、木星が微笑みながら穏やかに輝くことの希望以外に言うべきことがなかった。バルザックは、そうした私の当惑を見て、すぐに気を楽にさせてくれた。それで朝食の間に、私は彼のことを細かく観察出来るまでに十分に落ち着くことが出来た。

彼が着ていた部屋着は、腰紐に巻かれた白いカシミアとフランネルの衣装で、その姿は後に、ルイ・ブーランジェが描いた。一体、彼のどんな気まぐれが、決して脱ぎ棄てなかったその衣装を選ぶように駆り立てたのであろうか？ 彼は、作家の仕事とは修道院に籠もることと同様であると世間に宣告し、それは孤絶した生活の象徴でもあった。そのような小説におけるベネディクト教会の修道士として、その衣装を身に纏っていたのであろうか？ 何はともあれ、そうした部屋着は、いつも見事に似合っていた。彼は私に、その完全な袖を見せて自慢した。そして袖がインクの浸みなどで、少しも汚れていない理由を、「真の作家とは、その仕事の間は、いつもきちんとすべきである。」と言った。

修道服の襟を後ろにはだけて、強靱な運動選手や雄牛のような首は、円柱の付け根のように丸く、筋張りがなく、白いサテンのような首は、より赤みを帯びた顔と対照をなしている。その頃のバルザックは、まさに年盛りで、浪漫派の苦みと青白さとは少しも調和しない猛烈な活力の徴を呈していた。純粋なトゥール出身者の血が泡立ち、頬は快活な紅色に満ちていた。厚く曲がりくねった唇は温かく色づき、よく笑った。薄い口髭の膨らみは、その輪郭を隠さずに強調されていた。鼻先は四角く尖って、耳朶と大きく開いた鼻穴には、かなり独自の特徴があった。それはデヴィッド・ダンジェの胸像が示すバルザックに似ていた。特に立つのは、そうした鼻で

あった。額は広く高貴で綺麗で、顔の他の部分よりも白く、鼻筋は付け根から真直ぐに伸びて、折目がない。眉毛の上には前頭葉が、はっきりとした突出を成している。髪は豊富で長く硬く黒くて、ライオンの鬣のように後ろに流してあった。眼に関しては、決して並立しているだけでなく、生命と光と想像も及ばない磁力を持って、毎晩の徹夜疲れにもかかわらず、子供や処女の調和した2つの黒いダイヤモンドのように、純粹で透明で薄青く、白膜が豊かに光っている。それらは鷺の瞳孔のようであった。その眼は吸いこまれるほどに深い金色に輝き、きつと鷺でも負けて瞳を伏せてしまうであろう。それは壁や人の胸の内部をも見透かすような、怒った君主の千里眼も、猛獣使いの眼である⁽⁸⁾。

エミール・ド・ジラルダンは、『バルザック氏の杖』という題の彼女の小説で、その輝く目に関して次のように話す。

「タンクレーデはそれから、棍棒の前部に、トルコ石の、金の、素晴らしい彫刻を認めた。そして、それら全ての後ろに、宝石より一層と素晴らしい2つの大きい黒い目がある。」

それらの風変わりな目は、一度、それらの凝視に出会った途端に、繊細且つ不規則な他の特徴に気付くことを困難にした。

顔の習慣的な表情は、一種の強力な浮かれ騒ぎに似て、ラブレール風の修道士の喜悦があった。その部屋着は、アントムールのジーン兄弟のようであり、そうした意識の発生が、貢献したのは疑えない。けれども、それは第一級の方法によって拡張され高められたものであった。

その習慣に従って、バルザックは真夜中に起床して、私の到着まで書いていた。その容貌には、瞼の下の僅かな隈以外は、疲労が見えなかった。そして朝食の間に、野生的な陽気さをすっかり取り戻した。少しずつ会話は文学に関する方面に流れて行き、彼はフランス文学の大いなる困難に関する苦情を訴えた。文体のことが非常に彼の頭を悩ませていた。そして心から彼が全く、一定の文体を持っていないと信じ込んでいた。一般的に彼

が、こうした文体の質に欠けていると見なされたことは事実である。ヴィクトル・ユーゴーに学んだ者は、中世や16世紀の傾向を好み、様式、律動、構成、語彙の豊富さに於いて、韻文の訓練で、散文を破壊した。そして、ユーゴーの方法を信奉し、それを型にして巧く書く仕事をして、その判断に従って階調を整える以外に何も出来なかった。そこには役立つ型の型に嵌った、叙情性に欠けた近代的様式の描写の発見しかなかった。バルザックは、大衆に楽しまれ、人気が出始めたにもかかわらず、浪漫主義の偶像の仲間に入ることを許されなかった。そして彼はそのことを承知していた。彼の本が貪られる様に読まれている間も、人々は、その本質的な面を立ち止まって見つめようとしなかった。崇拜者達からも、長い間、彼とは最も生産力の多い小説家以外ではなかった。これは今日驚くべきことであり、私は自分の主張の真実を請け合うことが出来る。文体を形成することに、彼はとても苦悩した。そして、校正の心労に関して、何百回も彼より下位の人々に訴えた。そして、バルザックのペンネームを記入する以前に、百巻の書に亘って、所謂「匿名」として、異なる筆名（オラス・ド・サントーバン、ヴィエレルグ等）を使った。だが、彼は、みずから気付かずに、既に己の文体を所有していたのである。

しかし、何はともあれ私達の朝食の話に戻らせてもらいたい。その間、バルザックはナイフとフォークを弄んだ。そして、私は彼の手が稀に見るほど美しく、高僧の手のように真っ白で、指は細いが、実に豊かに爪が桃色に光っているのを指摘した。彼は、そのことを誇りに思っていた。私が、それに気付いたので、喜びで微笑した。彼は、その手が上流階級出身の証拠と考えていた。例えばバイロン卿は、明白な満足感を持って記している。それはアリ・パシャが彼の耳の小ささを褒め、そのことから正銘の紳士と推察したことである。手に関する私の類似の発言は、その作品の称賛よりさらに、バルザックを喜ばせた。彼には、その手足の繊細さに欠ける一種の偏見があったからである。食事のメニューはどちらかと言えば素晴らし

かったと言える。フォアグラ・パテも、その一つであった。しかし、彼が笑いながら言ったように、それは普通の習慣的儉約からの逸脱であった。そして「厳かな儀式」のもてなしには、その蔵書中から銀皿を借りて来るような贅沢さがあった！

私は、『クロニク・ド・パリ』のために幾つかの論文の執筆を約束して、引き上げた。それらは後に『ベルギー紀行』、『死霊の恋』、『黄金の鎖』や、他の文学作品として出版された。また、バルザックに呼ばれていたシャルル・ド・ベルナルも、『40女』、『黄色い薔薇』と、それ以降の全集に収録された若干の新しい仕事を提供した。周知のようにバルザックは30歳の女性を発明していた。ベルナルの作品は、その模倣に過ぎず、既に由緒ある年齢に10年を加えても、その女主人公の話は、少しも成功しなかった。

先に進む前に、一呼吸おいて、彼と私の従来からの知人に関する、若干の生活の詳細を述べておこう。私が引用する文献は、妹のロール・シュルヴィルの評伝と彼自身の作品からである⁽⁹⁾。

バルザックは1799年5月16日、よく前兆を予感するという彼の名前の意味に相応しく、賑やかな祝日にトゥールで生まれた。少年の彼は天才児ではなかった。時期早々に、『人間喜劇』を書くようなことは告げもせず、新鮮なバラ色の、健康で澁澁と優しい目をした遊び好きの少年であった。同年の少年達から目立つような所はなく、少なくとも通常の観察からはそうであった。7歳でトゥールの学校を去ると、オラトリアン達に運営されるヴァンドーム初等学校に通った。そこでも彼は、ごく平凡な生徒に見えた。

『ルイ・ランベール』の最初の部分は、バルザックの生涯に於けるこの時期に関して、興味深い知見を含んでいる。彼自身の性格を二つに分けて、彼自身はルイ・ランベールを、かつてのクラスメイトとして描写する。彼の名前で時々話をして、作者の精神に一種のレンズを当て、想像から、そ

れでも尚、真実を込めて、この人物に彼自身の感情を付与する。

「学校は町の真ん中にあり、傍らにはロワールの小川が校舎を洗うように流れていた。しかし、そこは柵を巡らした囲い地といった様子であった。敷地の中には礼拝堂、芝居の舞台、医務室、製パン所、庭園、小川などがあり、この種の学校に必要な施設が、全て収容されている。この寄宿舎は、教育施設としてフランスの中部地方で最も有名で、この地方だけでなく、植民地からも入学者がやって来る。遠く離れているために、親が時々、その子供達に会うために、ここに来るわけにはいかない。また休暇を学校から離れて過ごすことは、規則で禁じている。一度、彼等が入ったら、生徒らの学業の終わりまで学校を去ることが出来ない。神父の管理の下で外に出される遠足を例外として、国民議会的な訓育の長所を学校に与えるように、全てが予め計画されていた。私の時代では、『子供への体罰の役』は、まだ生きている記憶であった。そして革紐での折檻は、その酷いまでの役割を立派に演じていた。」(全集21・234)

このようにバルザックは、恐るべき学校での出来事を記述した。彼の想像力は、こうした記憶を執拗なまでに残しておいた。

エドガー・アラン・ポーは、『ウィリアム・ウィルソン』の短編小説で、子供時代を奇妙な誇張で記述する。その彼の英雄が教育されたエリザベス時代からの古い建物での奇妙な仲間のことは、『ルイ・ランベール』に劣らず、二つの比較は興味深い。けれども、ここは、そうした詳しい検討をする場所ではない。従って私は、その指摘だけで満足すべきである。

バルザックは、この学校で桁外れに苦しんだ。そして、そこで空想にふける彼の傾向は、幾つかの融通のきかない規則によって、全ての瞬間に襲撃された。彼は学業を無視した。

けれども、同時に図書館員であった数学の家庭教師との暗黙の共謀から利益を得た。そして普通の経験の領域の外にあった勉強に専念して、学科の勉強はせずに、彼が望んだ全ての本を借りた。「こうして、私達二人の

間で交わされた暗黙の協定に従って、私は先生が何一つ教えてくれなくても文句を言わないかわりに、先生の方でも私が本を借りることを黙認してくれた。私は秘密の読書で、全ての時間を過ごした。まもなく私はクラスの中で最も罰せられる生徒になった。付加の課題と放課後の居残りが、その休養時間を占拠した。」

ある特定の生徒には、処罰が一種の冷酷な反抗を引き起こす。そして、それに捕われた残忍な戦士が、彼等を拷問にかけ敵に向かって示す軽蔑的な無表情で、苛立った教師に反抗する。孤独や飢え、そして革紐の体罰は、最少の苦情を引き出すだけでは済まない。そこには主人と不動の殉教者の間に、親には理解出来ない死刑執行人の技術と同様に、恐ろしい対立がある。幾人かの神経質な教師は、憎悪に満ち、8歳あるいは10歳になる子供の、そうした軽蔑的反抗と恐怖の表情に耐えることは出来ない。

ここで、ルイ・ランベールの名前で、同じくバルザックが描いた幾つかの詳細な特徴を引いてみよう。「それまでは戸外の空気に慣れ、我儘な勉強をし、老人のやさしい手に愛撫され、太陽の下に思索する習慣を持っていたので、学校の規則に服従したり、列を組んで行進したり、80人もの生徒が各自の机を前に、木の椅子に静かに腰かけている部屋の中に、壁に囲まれて生活するのは、彼には酷く辛いことであった。彼の感覚は完成していて、鋭敏且つ繊細であった。こうした共同生活の中では、全てがそれに触れるのであった。空気を腐らせるような発散物が、食事の残り物で一杯の、いつも汚い教室の臭いと混合し、彼の嗅覚を悩ました。嗅覚は他の感覚よりも直接に脳に結びつき、その様々の変化で眼に見えない動きを思考器官に及ぼす。私達の教室の空気腐敗の原因はその他にもあり、祭日のために殺しておく鳩や、食堂から盗んで来た食物とか、それらを入れておく戸棚があった。最後にもう一つ、また教室に大きな石が据えてあって、その上に水を張った二つの桶があった。一種の水飼いで、私達は、毎朝に教師の面前で順番に顔や手を洗う。それで円卓につき、女性に髪を梳いて

もらい、髪粉を振ってもらった。毎日起床の前に一度しか洗わないので、部屋は常に汚かった。おまけに窓も沢山あり、戸口も高かったが、洗面所から発散する臭気や髪硫きや、例の戸棚や生徒達の悪戯や、また80人もの肉体が寄り集まっている臭いを勘定に入れなくても、空気は絶えず濁っていた。そうした学校の腐蝕に、私達が庭から持って来る泥が混合して、耐えられない臭いの肥料が出来上った。ランベールは以前に吸っていた清らかな田園の空気を奪われて、習慣も変り、規則に縛られて、全てが物悲しかった。彼はいつも頭を左手で支え、見台に肘をつき、勉強時間中に中庭の樹の葉や空の雲を眺めていた。その恰好は、いかにも勉強している様に見えた。しかし、彼のペンが少しも動かず、紙面が白いままなのを見て、教師は、『ランベール、君は何もしていないね』と怒った。」(全集21・242)

この学校生活での苦難の生々しい真実の描写に、私はバルザックが彼自身を特徴づける本質を追加してみよう。綽名のピタゴラスと詩人の二重性として、彼の分身が齎される。一人は彼自身の半分としてのルイ・ランベールであり、もう一人の自己は、他者に擬人化された自己の同一性であった。そして、これは彼が無能な子供として教師に見られた理由を見事に説明する。

「独立不羈の姿勢を守っていること、すること為すことが規則に外れていて、一見は何もせずと怠けていて、いつも無気力の状態に落ち、常に罰をくらうこと、宿題や罰課を嫌がることなどから、私達は手に負えない生徒という、異論のない評価をされた。神父達には見くびられ、クラス仲間でも同じように信用を落としてしまったが、実は揶揄われるのが怖さに、私達の非合法的な勉強のことは仲間には隠していた。こういう極端な状況は当然に私達と初等部の少年達とを戦争状態におくはずで、事実そのようになった。私達は大抵いつも皆から忘れられ、自習室の調和を乱すような植物か飾りのように、当面の間は半ば楽しく、そこにじっとしていた。だが、たまに仲間でも一番意地の悪いのが、体力を誇示するために攻撃を仕

掛けて来た。取り合わずにいると、それが原因で『詩人とピュタゴラス』がひどく殴られることも度々あった。こうした二重の軽蔑は、神父達の場合には不当であったが、クラス仲間の場合は自然な感情であった。私達はボール遊びも知らなかったし、駆けっこや竹馬に乗ることも出来なかった。大赦の日とか、時々自由を得た時も、学校で流行っている如何なる娯楽も共有しなかった。仲間たちの様々な楽しみを余所に、運動場の木陰に二人だけ憂鬱そうに坐っていた。だから『詩人とピュタゴラス』は例外であり、共同生活から食み出した生活だった。同級生達は私達の精神的位置が自分達のそれより高いか低いかを、その鋭い本能や微妙な自尊心で感じ取った。そこから、或る者には私達の貴族風の沈黙に対する憎しみが生まれ、他の者には私達が無用であることに対する侮蔑が生まれた。こうした感情は私達の知らない間に、皆の中に存在したのだが、もしかしたら今日やっと私に察しがついたことなのかも知れない。だから二人は自分達の見台のある自習室の片隅に、勉強時間も休み時間も同様に引き止められて、まるで二匹のネズミのように小さくなって生きていた。」(全集21・243)

これらの隠された仕事の結果は、彼が勉強の時間を使い尽くした瞑想の、『人間喜劇』で何度も話して有名になった「意志論」のことである。バルザックは、彼が、『ルイ・ランベール』で描写した最初の仕事の損失を、いつも悔しがった。そして彼は貴重な時間をかけた原稿の入った箱の没収に関して、衰えることのない情熱で話す。「幾人かの嫉妬深い仲間が、2人が守る箱を、猛烈に引っ手繰ろうとした。突然、争いの騒音に引き付けられて、オーグー神父が乱暴に介入し、その騒動を止めさせた。この酷い神父は、私達に箱を渡せと命じた。ランベールは鍵を手渡した。神父は原稿を取り出して、パラパラと捲った。やがて、それを没収して、『なるほど、こういうつまらないもののために、宿題を怠けているんだな』と言った。大粒の涙がランベールの目から落ちた。それは仲間に裏切られたのと同様に、不当な侮辱で精神的優越を傷つけられた感覚の意識から来る無念

の涙であった。神父は、『意志論』の科学的財宝としての重要さを認めずに、おそらくヴァンドームのどこかの食料品店にでも売り払い、その胚種は、無知蒙昧な人の手に渡り、散逸してしまった。」(全集21・257)

「ところで、『哲学的研究』の連作の先頭を切る作品の中で、私はランペールが実際に考え出した『意志論』という題名を、根も葉もない架空の作り物のために勝手に使った。また彼の愛人だった女性の名前(ポーリーヌ)を、作中の、男に誠意の限りを尽す若い娘の名前に使った。それもこれもルイのあの著作にふりかかった酷い災難の記念である。」(全集21・258)と付加する。

もし私が『あら皮』の頁を開くなら、結果的に、私はラファエルの自白に次の言葉を見いだす。「私の『意志論』を推賞してくれたのも君一人。私はこの大きな仕事のために、東洋の言語を習得し、解剖学や生理学まで勉強して、時間の大部分をこれに費やした。この著作こそ、もしこの私の思い過ごしでなければ、おそらく人間学に新しい道を開き、メスレル [フレデリック・メスレル1734-1815, フランスの医学者。動物磁気学を治療に応用したので有名], ラヴァテル [ジャン・ガスパール・ラヴァテル1741-1801, スイスの神学者で哲学者], ガル [フランツ・ガル1758-1828, ドイツの医学者。骨相学でも有名], ピシヤの業績を補うに足りるべきものであろう。分別がつき始めた年頃から、この『意志論』を脱稿するまで、私は絶えず観察し、学び、書き、読むことに終始して、その生活は、まるで長い罰を課せられたようだった。子供時代の終わりから私が自分の理論を仕上げた日まで、学び、書き、休みなく読み、観察した。それで私の生活は長い煩わしい仕事のように思われた。生まれながら女々しく、東洋風な安逸を好み、夢を愛し、淫蕩になじんでいた私が、今やパリ生活の享楽を味わうことさえ拒否して、働き通していたのだ。昔は貪食であった私が、今や禁欲的になり、かつては旅行、船旅を愛して諸国を訪れ、まるで子供のように、水上の石切り遊びに打ち興じたこの私が、ペンを手にして、不

断に机に向かう者となり、かつては饒舌な私が、静かに図書館や博物館の公開講義の言葉に耳を澄ますようになった。そして、サン・ブノワ派の僧侶のように、寂しい寝台に一人で眠った。だがそのような生活でも、女性には私にとって、たった一つの眩惑であった！」(全集3・78)

バルザックは「意志論」のことを後悔したにもかかわらず、次のように始まるインカ族の叙事詩の失敗には、それほど敏感ではなかった。

「ああインカよ、ああ運命づけられた悲劇の国王！」(全集21・239)

この不幸な直観から、彼が学校に在籍している間、詩人とは彼の嘲笑的な綽名であった。バルザックは、自ら告白せざるを得なかったが、少なくとも型通りの詩的才能を持っていなかった。彼の複雑な思想は詩的律動に反抗してしまった。

12歳あるいは14歳の子供のこうした真に巨大な知的努力、いわば強靱な瞑想から、奇妙な弊害や不安な熱狂が生じた。若いオノレの秘密の読書に関与しない教師には、全く説明がつかない居眠りが、学校での結果として生じた。彼はまるで愚かな怠け者に見えた。学校の誰も、知性のこの早熟の過剰を推察することが出来なかった。彼の体細胞には毎日が自由であっても、誰にも怠け者と思われた生徒が、既に年齢の典型的理解を越えた、図書館の本格的書籍の全部を吸収していたことを理解出来なかった。

ルイ・ランベールとは、即ちバルザック自身の帰一である。私はここに、その読解力に関する幾つかの奇妙な伏線を指摘してみよう。

「ルイ・ランベールは伯父の蔵書中の読むに値する様々な本の要点を、三年間で自分のものにした。読書による思想の吸収は、かねて彼の場合、珍しいまでの現象になっていた。目は一度に7行から8行ぐらいを見て取り、精神は彼の視線の素早さにも似た速度で、その意味を把握するのであった。時には文中の一語だけで、その文章の精髓を掴むのに十分であった。

彼の記憶力は驚嘆すべきものだった。読書によって獲得した思想と、内省や会話によって示唆された思想を、同様の正確さで思い出すのだった。

最後に彼はあらゆる記憶、即ち場所の、名前の、言葉の、事物の、形態の記憶を持っていた。問題の品物を思うが儘に思い出すだけでなく、かつて彼が目にした時と同じように、それがあつた場所を占め、或る光に照らされ、或る色に染まっているのを、彼自身の内に再びありありと見るのだった。こうした力は悟性の最も把握しがたい行為にも適用された。彼の言い方によれば、かつて様々な思想を採掘した本の中の、その鉱床を思い出すだけでなく、遠く過ぎ去つた時期の彼の魂の傾向をも思い出すのだった。」(全集21・230)

年が経つにつれて、バルザックはより大きな尺度で、彼の人生を通じて青年期のこの素晴らしい才能を維持した、そして真にヘラクレスの仕事としての、彼の巨大な仕事が説明出来るのは、このことを通してである。

不安な教師は、バルザックの親に出来るだけ早く彼のために学校へ来るよう手紙を書いた。彼の母親は急遽、彼をツールに連れ戻しに来た。愛らしい幼児の代わりに、学校から病弱で、ほっそりした子供が返つて来たのを見た時、家族の驚きは大きかった。そして、とりわけ祖母はそのことを実に嘆いた。彼は、美しい色と若者らしい逞しさを失っただけではなく、思想の混乱に捕われ、低能者のように見えた。そのうわの空な態度は、目を開けて眠る夢遊病者のようで、深い空想で我を見失い、言われたことを聞いていなかった。あるいは彼の心は、あまりにも遠くから戻つて来るので、その返答が遅かった。けれども戸外での休息や、家族の慈愛に満ちた環境で、彼に養生を強要した。そして、家族が強いた休息と彼の青春期の力強い体液が、まもなくこの青ざめた状態を克服させた。思想が次々と回転することが原因で、その若い脳に起こされた騒動は衰退した。少しずつ、混乱した状態が組織的になつて来た。抽象概念が実像と配合して、観察が生活を落ち着かせるようになった。彼は散歩を楽しみながら、ロワール川の美しい景観、郷土の様子、そしてサン・ジュルマン大聖堂と、司祭や大聖堂参事会員に特有の人相などを調査した。後に、『人間喜劇』の素晴ら

しいフレスコ画で、提示された想像の多くが、実り多い無活動のこの期間に写生された。しかしながら、バルザックの知性は認知されなかった。あるいは学校よりも一層、家族の中でそうであった。たとえ利口な言葉が彼の唇から零れたとしても、目上の母親は、彼に言うのであった。「あなたはきっと、自分が何を言っているのかさえも、分かっていないのよ！」そしてバルザックは、さらなる説明もせずに、持ち前の素晴らしい笑いを浮かべた。バルザックの父親は、その時代の哲学によって、モンテーニュやラブレール、アンクル・トビーなどの性格を共有していた。その独創性と人の良さ（それは娘のシュルヴィルとの会話にも窺える）と、彼が抱いていた特定の遺伝子理論のために、彼自身の子供が愚かではないと信じ、息子に関して、もう少しましな意見を持っていた。だが、父親には将来息子が偉大な人物になるとは、とても思えなかった。

バルザックの家族がパリに戻って、彼はサン・ルイ通りのルピートルとマレ地区トリニー通りのスガンジーとブーヅリンの寄宿学校に入れられた。

そこでもヴァンドームの学校と同じように、彼の天才はそれ自身を明らかにしなかった。彼は普通の学生の群れの間止まりという感じであった。

どんな知事も彼に、「あなたはマルセルであろう！」あるいは「従って星になる者であろう！」とも賞賛して叫ぶことはなかった。

彼は学科を終了した。バルザックは彼自身に、第二の真の教育を与え、自らの勉強を完成した。弁護士や公証人と共に働きながら、ソルボンヌ大学の講義に出席して、法律を勉強したのである。一見には不透明なこの時期に、バルザックは弁護士や公証人、そして裁判官にもなろうとしなかった。だが、この時期にバゾッシュの事務所の人達と一緒に、個人的な知己を得ることで、後の『人間喜劇』の中で、法律的訴訟を職業的なまで見事な形式で、小説を詳細に書くために、彼自身を仕向けていたのであった。

法律の試験に合格することで、如何なる職業を選択すべきかの重大な問題が提起された。彼の家族はバルザックが公証人になることを望んだ。だ

が、未来の素晴らしい作家は、誰も彼の天才を信じなかったが、彼自身はその自覚を持っていた。そして、法律家への道は最も有利な条件の位置を組織したが、彼はそれらを敬意を表する方法で拒否した。父親は息子が文学的創造の実力を証明するために、2年の時日を与えることにした。家族は、既に地方に戻っていたので、バルザック夫人は、多少の苦難が、彼をより賢明にすることを願って、ただ差し迫った必要の給付だけを許して、彼を屋根裏部屋に住ませた。

アースナル図書館の近くで、レディギユエール通りの9番地の屋根裏部屋は、若い仕事人にその資源を提供した。豊かで豪華な家から、惨めなあばら家に移り住むことは、バルザックの年齢の21歳以外のどんな年齢でも苦痛であろう。けれども、もし若者の夢が閉じた殻を持っているなら、全ての若者はみずからの部屋を所有することで、ポケットの鍵で、その部屋の真ん中に立つことが出来る。一つの部屋、それは男らしさの装飾であり、独立、個性、そして愛のことでもある！

テーブルの前に座り、彼の父から指摘された怠惰性を、むしろ正当化し、彼の友人達の好意的でない予測の誤認を立証する仕事を為そうとして、天空の近くに腰かけている主人としての彼を見てみよう。そして、バルザックが悲劇で、それも『クロムウエル』という人物と一緒に初登場したことは、まさに注目に値する！ その同時期に、ヴィクトル・ユーゴーもまた、その序文が、全ての若い劇作家の宣言になった所の、『クロムウエル』を書き上げた。

II.

個人的にバルザックと知合いの人が、注意深く『人間喜劇』を再読すれば、特に彼の初期の仕事で、その登場人物の生活に関して、奇妙に拡散する部分を見いだすであろう。そこでは彼はまだ彼自身の性格を切り離すこ

とが出来ずに、主題性の不足から彼自身のことを観察しながら分析する。私は、彼がアースナル図書館に近い、レディギュエール通りの屋根裏部屋の文学的生活で、無礼な見習いを始めたことを述べた。『ファチノ・カーネ』の作品は、1836年3月にパリで出版され、ルイーズに捧げられた。そこには彼の榮譽へ向かう瑞々しい意欲と、天空の巢に繋がれた生活に関する貴重な知見が含まれている。「その頃、私はあなたが知らないようなレディギュエールの小道に住んでいた。それはサン・タントワヌ通りから歩いて、噴水に近いバステューユ広場に真向いの、ラ・スリゼ通りへと抜けている。学問への愛が、私を一晩中も書き続けるような屋根裏に放り込んでいた。その日々を隣接する図書館で過ごした。生活は質素で、そうした仕事に必要な修道院の生活条件の全てを受け入れていた。天気が素晴らしい時は、ブルボン大通りを散策した。一つの或る情熱が、私を勤勉な習慣から引き離して、戸外へ連れ出すのであった。だが、それもやはり研究心からではなかったであろうか？ 私は場末の風俗や、そこに住んでいる人達の性格を観察しに行った。職人達と同じように汚いなりをして、また礼儀に無頓着だったから、少しも彼等に警戒されずに済んだ。私は彼等の群に立ちまじって、彼等が売買を取り決め、仕事を何時に終えるかという議論をするのを見た。私の場合、観察は既に直覚的になって、相手の肉体を見失わずに、その魂に深く入りこむのだった。と言うよりも、むしろ外部の細かなところを實によく掴んでしまうので、すぐさまそこから向こうにあるものを読むことが出来た。そうした観察は私に、その対象になった個人の生活を種にして生きるという能力を授けてくれた。それはちょうど『千一夜物語』の中に出て来るフィフィ教の僧侶が、相手に何か呪文を唱えながら相手の身体に乗り移って、その魂を自在に操るような工合に、観察される個人と入れ替わることが許可された。

或る晩、11時から真夜中になる頃、アンヴィーギュ・コミック座から、肩を並べて帰ってくる仕事人の夫婦と会った。好奇心に駆られて付いて行

くと、ポントシュー大通りからポーマルシェ大通まで行ってしまった。この善良な夫婦は、最初は彼等が、ちょうど見て来た芝居について話していたが、次には彼等自身の生活問題の処置に移った。母親は、子供の手を引いていたが、子供が苦情を言ったり質問をしても、それを無視していた。夫婦は翌日に、彼等に払われる金額を計算した。そして、それを片づける方法を色々と挙げた。また彼等は、家庭の問題や、馬鈴薯の過剰な価格に対する苦情と、長い冬からの石炭の値上がりや、パン屋への借金に関する威勢のいい主張に及んだ。そして彼等は苛立ってはいても、竟にははっきりと数値を示した言葉で、如何なる支払いや返済義務があるのかの活発な議論をした。こんな人達の話の聞いていると、私は彼等の生活と合一することが出来た。彼等の古着が自分の背中にかかり、また穴の開いた靴に足を入れているような気で、歩き廻るのだった。彼等の願いごととか必要な品物とか、全てが私の魂へ入ってきた。あるいは私の魂が彼等の魂と通じていた。それは覚めている者の夢想であった。彼等に理不尽な仕事をさせる工場の主人達に対し、また彼等に金を払わないで何度も無駄足を踏ませる性悪の得意先に対し、私は彼等と一緒にになって憤慨した。自分の習慣を棄て、精神作用の陶醉から自分とは異なる人間になること、思うが儘にそうした戯れに耽ること、それが私の気晴らしであった。自分がそんな才能を授かっているのは何のせいであろう。それは透視力の一種であろうか。その乱用の極みで、遂には狂ってしまうような、何か特別な性質なのだろうか。こうした力の拠りどころの原因を、私は決して探したことはなかった。私はそれを持っている、そして役立つ。ただそれだけである。私は一度もこの力の源泉を探求したことがない。それを所有し、そしてそれを使う。それだけのことだ。」（大学書林・9）

私は二重に興味深いこれらの作品の行を、ここに転写している。それらは少なくともバルザックの生活の既知の側面を照らし、それなしには仕事の実現は不可能であった所の、既に高い次元で持っていた強力な直覺的能

力の意識を示唆する。バルザックには、インドのヴィシュヌ神のように、変身の術があった。それはいわば、別の体に自己を化身する能力であり、望んだ限りにそこに住み着いたのである。ヴィシュヌの変身の数は10個に限定されるが、バルザックのものは無数であり、さらに彼は思うままに、それらを作り出すことが出来た。19世紀の只中で、これを言うのは僭越かも知れないが、バルザックとは一種の預言者であった。観察者としての彼の長所、生理学者としての鋭敏、作家としての天才も、『人間喜劇』で重要な役割を果たす所の、二千あるいは三千の典型の無限の多様性の説明に、少しも十分ではない。彼はそれらを複写したのではなく、理想的な方法で生きたのである。そうした服を纏い、習慣を引き受けて、取り巻きに没入し、それを環境に沈めて、彼は必要な限り、そのことに徹した。そこから生じる本格的な言語的論理を、決してそれ自体を否定も忘却もせず、親密で深遠な存在自体に賦与した。そうした表現を駆使することは、市民社会における生活への挑戦であった。普通の作家の創造で吸い込まれるインクの代わりに、彼には本当の赤い血が、その静脈を循環したのである。

バルザックは現代性というもの以外には、いつでもこうした能力を所有していなかった。彼は、侯爵や金融業者や中産階級、高級娼婦あるいは世界中の女性に、その思想を廻らすことが出来たが、過去の影は、その呼び出しに従わなかった。彼は決して、ゲーテのように、古代の深淵から美しいエレヌを呼び起こし、如何に彼女をファウストのゴシック様式の大邸宅に住ませるのかは知らなかった。2、3の例外はあるが、彼の全ての仕事は現代的である。彼は生者を同化したのであり、死者を復活させたのではない。歴史さえ、『人間喜劇』の序文にあるように、ほとんど彼を魅了しなかった。「歴史と呼ばれるあの乾燥したつまらない事実の目録を読むと、あらゆる時代において、エジプトでも、ペルシャでも、ギリシャでも、ローマでも、作家達が、私達のために風習の歴史を書き残すことを忘れていたとしか思えないのである。ローマ人の私生活についてのペトロニ

ウスの断章は、好奇心を満足させるどころか、私達を苛つかせる。」(筑摩書房・383)

バルザックは、歴史家に置き忘れられた社会空間の喪失の状態に、私達の時代のもので一杯になるような事柄を提示した。そして神は、彼が既に慎重に計画したことに従ったのを知っていた。

「社会は歴史家なのであって、私はただ秘書になればいいわけである。悪徳と美德の目録を作り、情熱の主要事実を集め、性格を描き出し、社会の主要な事件を選び、同じ性質の性格から特徴を集めて典型を構成していったならば、恐らく私は、多くの歴史家によって書き忘れられた歴史、即ち風俗の歴史を書くことか出来るであろう。

十九世紀のフランスについて、多くの忍耐と勇気とをもってすれば、私達の全てが、そういう本があれば良いのにと残念に思っているような本を実現させることになるであろう。その本とは、不幸にしてローマも、アテネも、ティルも、メンフィスも、ペルシャも、インドも、その文明について書き残しておいてくれなかったものである。またアベ・バルテルミーに倣って、勇敢で忍耐強いモンテイイが中世を主題として試みはしたが、結局ほとんど魅力のない形で終わってしまったものである。」(筑摩書房・384)

けれどもレディギユール通りの屋根裏部屋に戻ることにしよう。バルザックは、まだ彼を不滅にする仕事の計画を案出していなかった。彼は不安定にそれを探求し、仕事の緊張感で息を殺し、あらゆることを試行し、そして未だ何にも成功していなかった。

だが、彼は既にミネルヴァの仕事で、その頑固さを所有し、彼女がそうであるかも知れない同様の不機嫌で、来る日も来る日も別の利回りで暮らした。彼は喜歌劇に関する概説を作っていた。それはシュルヴィルが保持していたものであるが、コメディとドラマとロマンスの計画案である。『クロムウェル』の余りの酷さ加減を別にすれば、そうした『ステラ』『コシグル』『二人の哲学者』などには、数々の苦渋があり、尚且つ初期の叙事

詩やインカ族の詩よりも、遥かに価値が低いものである。

あなた自身で若年の彼のことを想像して見給え。継ぎ接ぎのコートに包まれた彼の脚，その上体は母親の古いショールで纏われ，一種の荘重な帽子を被り，そのひどい髪型は母親だけしか知らなかった。左には珈琲ポット，右にはインク壺，彼は胸を張って額を下げ，雄牛のように座っている。創造の現場は無表情で，その畝には，まだ無秩序な思想の痕跡しかない。ランプは暗い家の前に星のように輝き，雪が沈黙の中で緩んだタイルに静かに降る，風は「トゥルーのフルートの様に，心地よく」窓と扉を吹き抜ける。

もし，気楽に通り過ぎる人が，その微かに，そして執拗に揺らめいている光に向かって目を上げて，それが私達の時代の最大の栄光の一つの夜明けとは気づかなかったであろう。

あなたは，こうした創造の現場の写生を，別の角度から見てみたいであろうか。そうした真実の正確さは『あら皮』の中に描かれている。まさに彼自身に関して多くを含む仕事振りの様態とでも言おうか？

「下着類をぶらさげている長い物干竿を何本となく渡してある窓からは，近所の家々の屋根や中庭などを見下ろすことが出来た。薄汚く黄ばんだ壁は，貧困の臭気を漂わせて，ここに住みに来た学生を待っている。こんな部屋ほどに凄まじいものはない。屋根は整然とした傾斜を見せ，瓦の透けた間からは空が覗いている。寝台とテーブルと，それに椅子を何脚か置くだけの場所があって，屋根からの狭い片隅にはピアノを置くことも出来る。(中略) 天空に浮かんだ墓場のようなこの室で，私はほとんど三年近い年月を，夜も昼も，まるで研究そのものが私の人生の最も美しい問題であり，最も幸福な解決であると思いながら，ある種の願望を抱いて研究を続けた。学者が必要とする平静と沈黙には，何かしら恋のように甘く，心を酔わせるものが潜んでいる。(中略) そして，研究は，私達を取り巻く全ての事柄に不思議な魔力を与える。ものを書く時に使っている質素な仕事机，そ

の覆いにした褐色の羊の革、ピアノ、寝台、肘掛椅子、妖しげな模様の壁紙、家財道具と、全てのものに一定の生気が鼓吹され、私の慎ましい友人になり、私の未来のもの言わぬ加担者にもなってくれるのだった。これらの周囲のものを眺めながら、私は何度と自分の心を、彼等に伝えたことであろう！ 曲線をえがいた縁辺にそって目ざしを走らせながら、私はしばしば、何か新しい理論の展開に思い至り、自分の思想体系に適切な論理を発見し、あるいはまた、ほとんど言葉にならない思想を表現するのに、実に適切と思われる文句を見つけだすことが出来た。」（全集21・76）

この同じ一節で、彼は彼の仕事を仄めかす。「これよりさき、私は二つの大作を計画していた。一つの喜劇の方は、日ならずして私を有名にし、私に財産を与え、私が天才の主権を振りかざしながら、再度、待望の世界に立ち帰る機縁ともなるべきはずの作品だった。ところが諸君はこの傑作に、学校を出たての青年が冒す大きな誤算、兎戯に類する馬鹿らしさしか見ようとはしなかった。諸君の嘲弄にあって、豊かな眩惑の翼は断ち切られたまま、ついに再び目覚めようとはしなかった。」（全集21・76）

そのもう一つは、家族と集まった友人達の前で読み上げられて、そこで良からぬ運命を認識することになり、完全に失敗であった『クロムウェル』のことである。

註

- (1) 本稿では、*HONORÉ DE BALZAC PAR THÉOPHILE GAUTIER ÉDITION REVUE ET AUGMENTÉE PARIS POULET MALASSIS ET DE BROISE LIBRAIRES ÉDITEURS* 9, rue des Beaux Arts 1859 を使用した。尚、翻訳は原文と照合しながら、既訳の『バルザック全集』（東京創元社）を参考にした。主に使用したのは、全集第3巻の『あら皮』（山内義雄、鈴木健朗）と第21巻の『ルイ・ランベール』（水野亮）、『人間喜劇』の「序文」は、『バルザック I』（水野亮、筑摩世界文学大系28、1972年）、『ファチノ・カーネ』は、（石田友夫、大学書林、1960年）である。ゴーティエの地の文との関係から、字句や文脈を変更したが、文中の「引用」の末尾に（全集21・234）（大学書林・9）（筑摩書房・383）のように、巻号と頁数を入れた。また、START OF

- THIS PROJECT GUTENBERG EBOOK *HONORÉ DE BALZAC* Produced by Transcribed and produced by David Desmond The Echo Library 2017の英訳も参考にした。
- (2) 『十九世紀フランス文学』(V.Lソーニエ, 1952年, 共訳 篠田浩一郎・渋沢孝輔, 白水社, 1958年)や『フランス文学案内』渡辺一夫, 鈴木力衛, 岩波書店, 1961年)そして、『フランス文学辞典』(白水社, 1974年)などを参照した。
- (3) 『わが兄バルザック—その生涯と作品』(ロール・シュルヴィル, 1858年, 訳者 大竹仁子, 中村加津, 鳥影社, 1993年)で, 訳者の中村は, 「極限すれば, この書の中に書かれていることを直接的, または間接的にはあっても, 全く利用せずにバルザック論を書いた人はいない」と言い, 『家族への書簡, 1805年-1850年, バルザック夫人より息子への書簡を含む』(W・S・ヘイスティング, アルバン・ミシェル社, 1950年)からの実証的な対比によるシュルヴィルの書簡の改竄を踏まえても, その価値に変わりはないとする。
- (4) 拙訳(『バルザック逸話集』<序文と編集ジュール・ベルトー>の翻訳1『専修人文論集第99号』2016年11月)と(『バルザック逸話集』(序文と編集ジュール・ベルトー)の翻訳2『専修人文論集第100号』2017年)。そこには11個を数えるレオン・ゴズランを中心に, 妹のシュルヴィルや, そしてゴーティエ, ラ・マルティエス, ジョルジュ・サンド, ヴェルデそしてヴィクトル・ユーゴーなどの逸話が編集されている。この逸話集に於いて, バルザックと一緒にゴーティエも, 他の語り手や無記名の話の中に, しばしば登場する。今日では誰もが, バルザックの肖像を写真などで見ている。彼が大食漢で, 無類の珈琲好きであり, 膨大な恋文を書いていたことも周知である。しかし, そうした顔の表情や生理的特質あるいは恋文を書くことの意味を, ゴーティエのように絵画的に鮮やかな文章で描いた例は少ない。
- (5) (『バルザック』(シュテファン・ツヴァイク, 1944年, 訳者 水野亮, 早川書房, 1959年)は, 一つの古典的評伝である。だが, ツヴァイクの『バルザック』の原書は, 出版前に本人が亡くなり, その残された妻とフリーデントールという友人の加筆によって, ドイツ語で上梓された作品である。それは直接的なバルザックの原像からは, やはり距離がある。水野亮の名訳で触れることの出来る翻訳は, 元々はツヴァイクの主観的なバルザック像が, 文化的変遷を通して成立した評伝である。
- (6) (『バルザック伝』(アンリ・トロワイヤ, 1995年, 訳者 尾河直哉, 白水社, 1999年)に, 示唆される点が多い。『バルザックの肖像』という題名が相応しいゴーティエの *Honoré de Balzac* の日本語訳がないのは, バルザック作品からの引用が比較的多いことや, その指摘がバルザック研究に於ける当然の了解事項とすることからであろう。『バルザック 天才と俗物の間』(霧生和夫, 中央公論社, 1978年)や『バルザック 人と思想』(高山鉄男, 清水書院, 1999年)にも, ゴーティエの *Honoré de Balzac* の指摘は, 頻繁に摘要がされているが, 『バルザックの肖像』には, 原文作品の引用の仕方を含めて, 近代的評伝の方法の一つの原型が存在するので, 単なる高踏派には分類出来ないゴーティエのバルザック論の全文訳は, あったほうが良い。

- (7) (『ボードレール』テオフィル・ゴーティエ 訳者 井村実名子, 2011年, 国書刊行会) で井村は, 『『見者』voyant と聞けば, 誰でもアルチュール・ランボアの『見者の手紙』(1879年5月)を思い浮かべるだろう。あまり注目されない事実だが, ゴーティエはこの語の用例における先駆者だった。30年代後半にバルザックの創作助手をつとめたゴーティエの書いた懐古的な評伝『オノレ・ド・バルザック』(初出, 1858年)のなかに, 『ファチノ・カーネ』の作者が「第二の視覚」une seconde vue と呼ぶ異様な透視力を称賛するくだりがある。」と指摘し, そのことを先駆的なゴーティエがバルザックに「見者」の称号を進呈したと解釈する。また, 批評家のポーラン・ルメラックが, ゴーティエ以前に「バルザックは観察家ではない, 見者だ」(「現代小説とバルザックについて」1853年8月)と書いた記事も紹介する。井村の精密な注釈はとても参考になった。本稿では, 4回の連作で全文を訳読し直してから, 最後の回で幾つかの語釈や注釈を付加したい。尚, 田辺貞之助にも, (『ボードレール論』テオフィル・ゴーティエ, 創元選書1948年)の翻訳がある。
- (8) 前註4, 『バルザック逸話集』(1)。
- (9) 前註3, 『わが兄バルザック—その生涯と作品』。